HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	陳, 静静
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13405号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74482
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jingjing_Chen_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　陳　静静

学位論文題名
『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究

・本論文の観点と方法

清朝末期の中国では、西洋の近代文明を取り入れるために、日本からのルートが近道だと認識されていた。その方法として、日本の新聞記事を翻訳することが最も早いものであった。しかし、当時の中国では日本語の翻訳者は極めて不足していた。清国留学生が日本から帰国して活躍する以前にあって、日本人翻訳者の協力を欠く状況のなかで、中国人の手による翻訳初期のものとして『実学報』は貴重な資料と位置付けられる。

本論文は、1897 年に上海で刊行された『実学報』を対象として、その「東報輯訳」「東報訳補」欄（以下、「東文報訳」と略す）のソース記事、日本漢字語の受容状況、翻訳の際に参照した書物、『時務報』との関係など、翻訳事情に関連する事項を包括的に分析し、清末の中国人による翻訳の初期における中日語彙交渉の実態を実証的に考察したものである。

本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」欄が最初とされている。その翻訳者は日本人漢学者の古城貞吉氏であった。『実学報』は、『時務報』の翌年に刊行され、日本語翻訳者の協力を欠くなか、中国人翻訳者 4 人によって 139 本の訳文を中国社会に提供した。中国人翻訳者が日本語を中国語に翻訳した点で貴重な言語資料となっている。しかし、『実学報』の研究ははじまったばかりであり、多くの課題が残されている。『実学報』に関する研究は、主に中日同形語の観点で行われた。その成果によると、『実学報』の訳文では日本漢字語 812 語が使用され、特に中国で「科学」という言葉を最初に使用したのは『実学報』「東報訳補」欄であることが分かったが、翻訳者の日本漢字語への受容度に関しては触れていなかった。また、日本漢字語以外の翻訳や、翻訳の際に参照した書物、『時務報』の訳語との関係などにも触れていなかった。なお、「日本漢字語」は、秦春芳に従って「中国または日本において創造された漢字表記語（漢字語）の中で、西洋文明と接触する際、新事物・新概念を表わす意味・用法が日本語に出自を持っているもの」と定義して研究を進める。

・本論文の内容

本論文は、序論で挙げた課題をめぐって、中日同形語の視点からの研究を補い、翻訳の視点から『実学報』の日本漢字語を再検討するとともに、視野を広げて日本語の外来語の翻訳から『実学報』の翻訳事情を考察した。本論文で明らかにし得たことを以下にまとめる。

第 1 章では、先行研究とその問題点を整理し、本論文の研究課題を提示した。

第 2 章では、典拠となったソース記事の再調査によって、実在しなかった新聞や出典記録のない記事などを探し出し、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事 138 本を明らかにした。出典記録の間違いを訂正したうえで、『実学報』を通して中国に導入された日本の新聞を 9 種に確定した。近代日本の新聞における類似度の高い記事と照合により、紙面の汚損によりこれまで判読に困難のあった記事の内容を明瞭に判読することが可能となった。

第 3 章では、同一ソース記事に基づいた 2 本の訳文を取り上げ、翻訳者の間の用語傾向を考察した。138 本のうち、前期と後期に 2 人の翻訳者によって翻訳されたのは『中外商業新報』明治 30 年 9 月 14 日掲載の「廣東金礦の發見」のみであった。それに基づいた孫福保・程起鵬両氏の訳文 2 本を日本語原文と照合し、文字・語彙・文単位での考察によって、字面では程訳が原文に近いが、原

文の意味を伝える面においては孫訳が優れていることが分かった。程氏は新語を積極的に使用したのに対して、孫氏は比較的慎重な態度を示していると結論付けた。

第 4 章では、まず『実学報』における日本漢字語の位置付けを提示した。さらに、注釈付き語に関して、孫福保氏を主として、訳文に多くの注釈を残すことに着目して、注釈付きの語と注釈なし語に分けて翻訳者の日本漢字語への認識を検討した。それらの注釈内容を分析した結果、翻訳者が漢文教養を活かして説明しようとした姿勢が認められた。しかし、「巡査」「方針」のように日本漢字語の意味として理解しなかった例があり、その他、「諏訪」のように漢字表記語を日本漢字語と誤解した例があることが判明した。一方で、注釈を付さない語に関して、日本漢字語「時間」を例に考察した。近代の重要な概念としての「時間」が原文に現れず、日本独自の意味の時をかぞえる単位の「時間」に対して、その時代に一番相応しい訳語“點鐘”が施されたほか、同形語“時間”が『実学報』の翻訳より中国社会に紹介され、短期間で中国社会に受け容れられたと推定した。

第 5 章では、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事に掲載されている外来語を A 類「漢字あり片仮名語」と B 類「片仮名単一表記語」とに分けて翻訳状況を分析した。漢字表記がある場合には、その漢字表記を継承しやすいが、漢字表記がない場合には、音訳または意訳の工夫がなされたが、翻訳作業が進むにつれて音訳語に当てられた漢字に一定の規則性が観察された。また、同紙に掲載された「中西合璧表」と比較した結果、英報訳語を参照していないと結論付けた。

第 6 章では、『実学報』音訳語における片仮名と漢字との対応関係を利用して、音訳語の作成に参照した書物を推定した。陳天麒の日本語教科書『東語入門』(1895) の発音の説明部分と本文内容と照合した結果、『実学報』音訳語を作成する際、『東語入門』から強い影響を受けたことを収録の「いろは歌」などと対比して明らかにした。さらに、『東語入門』と異なる片仮名と漢字の対応を他の日本語研究資料と比較した結果、『実学報』の前期と後期に黄慶頤の『策鰲雑摭』(1889)「音注日本字母正草二体」を参照した音訳語が十数語見つかった。この結果により、『実学報』の翻訳時において、上記二書を参照したことが確実となった。

第 7 章では、『実学報』の音訳語を『時務報』と比較対照し、『実学報』の翻訳の特徴を検討した。両紙における共通外来語の翻訳、両紙における片仮名と漢字の対応から考察した結果、両紙音訳語には参照関係が見られないが、それぞれの母語干渉があるにも関わらず、ともに中国語方言訛りの音訳字が見られる。そして、『時務報』は中国既存語を尊重しつつ、同紙中国人による英報訳語を参照したのに対して、『実学報』は同紙の英報訳語を参照せず、『東語入門』などを参照して機械的に音訳語を施した特徴が見られた。

以上のことから、本論文は、清末日本へ留学した中国人が活躍する前の段階に、積極的に日本の新聞記事を翻訳し、中国社会に紹介する『実学報』の翻訳事情をめぐって、中日語彙交渉の実態を実証的に明らかにした。本研究を通して、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事をすべて確定し、従来の中日同形語の視点の研究を補って、翻訳の視点から日本漢字語を検討すべきことを提案した。また、音訳語における片仮名と漢字の対応から参照した書物を確定した。本研究の成果は、今後の研究に新しい分析方法を導き出すという点において、大きな貢献をなしたと考える。